



Vol.25
春号

真宗大谷派（東本願寺）
広島別院教化委員会 発行

春彼岸会が勤まる

三月二十二日、春彼岸会が勤められました。春の陽気の中、県内各地より大勢の参詣がありました。講師は菅川知由師安芸北組・光楽寺住職が勤めました。以下、法話の抄録です。

●一寸先は闇二先祖のつめき声

庶民信仰というのは理屈ではなく、生活の中の実感を先祖が伝えてきたものである。「一寸先は闇」という言葉も、先祖たちが生活の中で実感してきたつめき声である。教員時代の教え子を突然事故で亡くした。それが日々子どもたちと関わる私にとって本気の悩みとなった。

●人生の忘れ物

広島止まりの新幹線に乗り、終点が近づく。「長らくのご乗車ありがとうございました。間もなく終点広島です。お忘れ物のないように・・・」というアナウンスが最近、「長らくの人生、ご苦勞様でした。お忘れ物のないよう終わってください」と聞こえる。振り返れば沢山、忘れていたなあと思う。

●何を忘れていたのか

御文に「我やさき、人やさき」とあるが、私たちは死について「人やさき、人やさき」と他人事と思っている。明日があるかどうかわからない。だからこそ、今という時を大切に生きなさいということをお忘れしている。



講師：菅川知由 師

●人の死を通して教えに遇う
人それぞれに仏縁をいただく機会がある。私は教員時代の生徒の死を通して、明日は分からぬ、今を大切に生きよ、という教えに出遇わせていただいていた。だからこそ一日一日、大切に生かさせていただければと思う。

お寺の活動いろいろ

安芸南組推進員研修会

二月二十六日に安芸南組推進員研修会が開催されました。

講師の瓜生崇先生（近江第八組玄照寺）は、かつて新宗教の信者として活動していた自身の体験を交え、新宗教の持つ問題性を親鸞聖人の教えを通して話されました。以下、抄録です。

「人間は自分が正しいことをしていると思っている時が一番厄介である。新宗教の特徴として、正しい人間になろう、正しい社会を作ろうなど、正しさ依存というものがある。正しさに依存すれば、理想に合わないものを排除しようとする。私たち真宗門徒はどうだろうか。新宗教の問題を決して他人事とみるべきではない。

ある先生曰く、真宗の聞法は、正しい自分になっていくために聞くのではない。自分の中の正しいと聞いていることを壊していただくのである」と教えを聞く姿勢について話されました。



講師：瓜生 崇 師

真宗基礎講座

(第三回・第四回)

二月十六日・四月十三日に真宗基礎講座が開催されました。

講師の三明智彰先生は、「比叡山で修行をしていた十九歳の親鸞聖人は、磯長の聖徳太子廟で太子の夢告を受けた。夢告を受けるといことは、夢に見るほど若き日の聖人の苦悩が深かったということである」と話されました。



講師：三明 智彰 師

広島別院団体参拝

左記の団体が団体参拝されました。お参りいただき、誠に有難うございました。

二月八日

金沢教区広報委員会 様

お寺のハテナ？ 『華瓶』



お内仏(仏壇)の中に、コップや湯飲みで水やお茶をお供えしているのを見かけます。しかし、浄土真宗ではコップや湯飲みは用いません。華瓶(けびょう)に水を入れ、櫛(しきみ)など青い葉っぱを挿します。華瓶には色花や造花は挿しません。水を飲むためではなく、櫛を挿すことによって香水をお供えするという意味があります。櫛は水を清らかにするとされ、櫛を華瓶に挿すことで、浄土にある八功德水はつとくどくすいを表現しています。

- 灯明・・・仏の智慧
- 花・・・仏の慈悲
- 水・・・仏の功德

という意味があります。そうした仏のはたらきを表すために仏前を飾ります。



法座・講座等のお知らせ

7月6日(土) 非核非戦法会兼原爆死没者追弔会

【講師】 古田和弘 先生 (大谷大学名誉教授)

【日程】 14:00～勤行
15:00～法話 16:40 終了予定



＜非核非戦法会 兼 原爆死没者追弔会をお勤めします。仏教の視点から戦争の問題について語られます。お誘いあわせのうえ、ご参詣ください＞

6月29日(土) 真宗基礎講座 -親鸞の生き方にたずねて-

【講師】 三明智彰 先生 (九州大谷短期大学学長)

【日程】 毎回 13:30～16:00 【会費】 500円

【会期】 6月が最終回です

＜親鸞聖人のご生涯をたずね、浄土真宗の教えの基礎を学ぶ講座です＞



毎月5日 定例法話 (ご今日の集い)

【講師】 県内僧侶(月替わり) 【日程】 14:00～勤行と法話(15:00 終了予定)

＜広島別院開基 教如上人の御命日(毎月5日)に法話会があります。＞

道場樹

【編集室より】

今年雪が少ない冬だった。暖冬の影響だろうか？いや、暖かくはない。うちのお寺は中山間地域にあり、寒さは厳しい日々であったが、なにせ雪が降らない。どうしたものかと、近所の方々も「こんなの初めてじゃ」と。

寒さは厳しいが、雪の少ない冬が終わり、春を迎えたと思いきや、彼岸前と四月に入って雪が降るといふ、何とも言えない今日この頃。

寒さは厳しかったと、先ほど述べたが、今年の冬はとても快適に過ごした。なぜか？それは、病院という温度調整抜群の施設でひと月過ごしたからだ。入院中は、様々なことが気になって仕方なかった。早く退院したいと思っていたが、いざ、退院して帰ってみると、たくさんやることがあるし、まだまだ寒いし、「はあ」とため息ばかり。

しかし、先日、退院後の受診で病院を訪れ、病棟に顔をのぞかせた。退院後ひと月経過したが、「あらまあ、お久しぶり！どんな調子ですか？」と、素敵な笑顔で迎えてもらった。心に春を迎えることができた。

(M・G)